

移入種点描 ニュージーランドの場合

田中徳久(学芸員)

ニュージーランドは美しいサザン・アルプスの景観(図1)や固有性の高い動植物相をもつことで知られています。植物の場合では、シダ植物と種子植物を合わせて、在来植物約2,300種のうち、85%が固有植物であるといわれています。キク科で340種、イネ科で200種、カヤツリグサ科で180種、ゴマノハグサ科で130種が固有種です。

ところが、このような固有性の高い独自の自然をもつニュージーランドですが、その国土の多くは牧場や農場に開発されています。また、釣りのために河川にはマスが放流され、狩猟のために原野にはシカが導入されています。植物の場合では、2,300種の在来植物に対し、1,800種以上の帰化植物が確認されています。キク科の215種、イネ科の220種、カヤツリグサ科の121種などはその一部で、一時期は、『移入(帰化)種先進国』、『移入(帰化)種大国』と揶揄されたこともあります。日本でもおなじみのヘラオオバコ(ヨーロッパ原産;図2)やカモガヤ、ヤセウツボ、ブタナ、アカバナリリハコベ



図1. 氷河を抱くセフトン山と高山植物(マウント・クック国立公園)



図2. 日本でもよくみられるヘラオオバコ(テカポ湖)

もしっかり帰化しています。ニュージーランドの植物相をまとめた「Flora of New Zealand」という5巻の本では、その1冊に単子葉植物を除く帰化植物がまとめられているほどです(それも5冊の中で1番厚い)。

また、氷河と高山植物などに混じって、テカポ湖やサザン・アルプスを背景に咲くルピナスをあしらった観光パンフレットをご覧になった方も多いのではないのでしょうか。このルピナス(図3)は、ニュージーランドのシンボルのようによく登場しますが、北アメリカ原産のれっきとした移入植物(現在は広範に逸出し自生している帰化植物)です。実際、ニュージーランドを旅すると、あちこちでルピナスの群生地を見かけます。景観的にも美しいとはいえ、その素性は問題です。ましてや観光ポスターに利用されるとは…。さらに、このルピナス以上に大地を覆い尽くし、帰化植物として駆除が必要とされているのがハリエニシダです(図4)。河原や路傍に大群落を作っていました。ボウズ・ヒル山の山頂からはクイーンズタウンの町が黄金色に染まって見えるほどでした。

しかし、『移入(帰化)種先進国』ニュージーランドも変わりつつあります。「最強の害獣」と呼ばれるポッサム(フクロネズミ)の駆除問題や、国鳥キーウィの減少に端を発し、『世界でもっとも移入種対策に熱心な国』へと変貌しつつあるのです。河川に放流されるマスについても、科学的にしっかり資源管理されています。皆無ではありませんが、ルピナスが観光ポスターに用いられる例も少なくなったようです。もともと空港では外国からの動植物の持込に対する検疫が厳しかったのですが、より拍車がかかった状態です。法的にも資源管理法(1991年;自然資源および天然資源についてのサステイナブル[sustainable=持続可能]な管理を促進する)、生物安全保障法(1993年;法で指定される害虫や不要生物は輸入、国内流通、野外放出が禁止され、駆除対象となる)、有害物質・新生物法(1996年;未導入の外來生物や遺伝子組み換え生物は環境リ



図3. ルピナス(テカポ湖)



図4. 原野を席卷するハリエニシダ(クライストチャーチ〜テカポ湖)

スク管理委員会の承認を得てからでないと輸入できない)などが整備されています。

それでも、ニュージーランドが解決しなければならない問題は山積みです。しかし、ブラックバスや外国産カブトムシ・クワガタムシ、タイワンリスなどの移入生物の問題が顕在化しはじめつつある日本の状況と比べると、先進的です。日本では、上記のような問題に関する一般の人々の危機意識はそれほど高くないように感じます。ニュージーランドでは、国民の意識を改革するため、社会教育も含めた教育に大きな力を注いでいます。今後、日本の移入種問題を考え、解決していく上での指針を、ニュージーランドの取り組みにみることもできません。

なお、本稿の一部は、9月に当館で開催するシンポジウムで講師を務めていただく予定の平田剛士氏のルポを参考にさせていただきました。